

“暮らす”を想像させる移住体験プログラムのデザイン

○小木 竣介*1, ○長谷川 福*1, 小松 輝*2, 竹田 風子*2, 吉田 悠*1

Shunsuke OGI, Moto HASEGAWA, Hikaru KOMATSU, Fuko TAKEDA, Haruka YOSHIDA

*1 日本大学 生産工学部

*2 株式会社リペリエンス

キーワード：移住；体験；交流；コミュニティ；道東

1. はじめに

近年、日本では少子高齢化と若年層の都市流出により、地方の人口減少や地域コミュニティの衰退が深刻化している。こうした状況に対し自治体は移住促進対策を進めており、北海道十勝郡浦幌町では移住希望者を対象に体験住宅で地域の暮らしを体験する移住体験プログラムを提供している。しかし、現行のプログラムは、滞在中に地域住民と交流する仕組みや、生活情報・産業との結びつきが不足しており、地域での具体的な暮らしの想像につながりにくいという課題がある。そこで本研究では、UX デザインの手法を用いて、地域での暮らしを具体的に想像でき希望者の移住決定を促進する移住体験プログラムをデザインすることを目的とする。

2. 方法

北海道浦幌町において、移住希望者が地域での暮らしを具体的に想像できる体験プログラムを設計した。プログラムは3日間とし、地域住民との自然な交流を促す「井戸端会議」をコンセプトに、衣・食・住・土地・交流の日常行為を地域住民と一緒に体験することで生活の解像度が高まるよう設計した。1日目は地元住民との食事による交流、2日目は就業体験と温泉・飲食店の利用による日常の暮らしの体験、3日目は自由行動により地域での暮らし方を主体的に想像してもらうという構成とした。

8～10月に1回ずつ合計3回、提案する体験プログラムを検証した。参加者は各回1名であった。参加者にプログラム終了後にインタビューを行い、得られた発言をオープンコーディング^[1]にて分析した。各発言について、日常行為（衣・食・住・土地・交流の5要素）と感情変化（心理的距離・生活意識・地域関心の3要素）の2軸に関するコードを付与し、要素間の関連性に着目した分析を行った。分析では日常行為と感情変化の各要素がポジティブかネガティブかも考慮した。

3. 結果と考察

3名の参加者A、B、Cの発言を分析した結果を図1に示す。参加者Aは既に移住済みであり、参加者

		参加者A					参加者B					参加者C				
		交流	土地	住	食	衣	交流	土地	住	食	衣	交流	土地	住	食	衣
心理的距離	+	6	3	1	2		5	1				9	17			
	-		2	1			2									
生活意識	+	6	1	2	1		3		2			2	4	5	5	1
	-							2	2			1	2	2		
地域関心	+	2	2		1		1	2				6	8	1		
	-		1				2	1	2	1				1	2	

図1 日常行為と感情変化との関連性分析結果

BおよびCは移住希望者（未移住）であった。図の各セルは2軸の各要素のコードが両方付与された発言数を示す。例えば、参加者Aの一番左上のセルは心理的距離と交流の両方のコードが付与された発言が6個あったことを表す。

参加者BおよびCについては、ポジティブな心理的距離に関わる要素として交流(5および9)、土地(1および17)があったことが分かる。一方、生活意識に関しては、土地、住、食、衣がポジティブとネガティブの両方の要素が影響していた(BとCのポジティブ・ネガティブの合計件数が土地、住、食、衣の順に8, 9, 5, 1)。以上から、本体験プログラムは未移住者に対して地域への心理的距離にポジティブな影響を与え、かつ、生活においてはポジティブだけでなくネガティブな側面も認識し具体的な暮らしを想像できる効果があることが示唆される。

未移住者と既に移住済みの参加者間で異なる傾向が見られた。具体的には、心理的距離に関して、未移住者の参加者BとCは交流、土地のみが影響を与える要素であるのに対し、移住済みの参加者Aは上記に加えて住、食も影響を与える要素であった。これは、移住者には衣食住も地域との心理的距離を感じる要素であり、地域特性やコミュニティが直接的な生活の要素として捉えられている結果と考えられる。

参考文献

[1] 佐藤郁哉, QDA ソフトを活用する実践質的データ分析入門, 新曜社, 161p (2008).

職住一体のライフスタイルで“場所を育てる”

中標津町における空き家活用の実践

○橋本 光希^{*1}

Koki HASHIMOTO^{*1}

^{*1}株式会社小野自動車商会 空間企画部門

キーワード：中標津；職住一体；空き家活用；建築；不動産

1. はじめに

株式会社小野自動車商会が中標津町で実施する旧教職員住宅 6 棟を対象とした再活用計画について報告する。本計画は、空き家を地域の生活圏に再編し、地域住民の新たな居場所の形成を試みるものである。

また、現段階で本計画の核としている「職住一体」は“住まう”と“商う”を同一空間又は隣接空間に配置し、地域に開放的な生活圏を形成する概念である。

2. 敷地・既存建築物の詳細

対象地は町の中心部に近接した準工業地域内の敷地であり、中標津空港線に沿って 6 棟が連続して配置されている。かつては教職員住宅として利用されていたが、長期にわたり未利用の状態にあった。構造はコンクリートブロック造の平家建であり、簡潔な構造と十分な改修余地を有する。



図 1 対象地外観

3. 職住一体について

地方における人口減少や働き方の変遷、小規模事業への参加意識の高まりを背景として、職住一体型の空間需要は増加している。特に店舗開業コストの高さや移住政策への注目は、本概念が地域社会における課題解決の一助となる可能性を示す。

4. 地域におけるニーズと波及効果

中標津町でも小商いの希望者、複業層、定住意向を持つ移住者等から潜在的需要が確認され、職住一体の導入は、創業支援、地域コミュニティの更新、空家減少などの波及効果をもたらす可能性を有する。

5. 現在の進捗

改修は、敷地内動線、今後の段階的整備との整合性、想定用途との適合性を考慮し、共用空間と管理機能を備える棟（以下 F 棟）を初期着手棟とした。

方針として、既存建物の性能確保、安全性を優先し、設備更新や内外装の基礎的改修を中心に進めている。また、職住一体としての利用を見据え、可変性の確保や将来的な用途転換への対応を念頭に置きながら計画を進行中である。現段階では、F 棟の構造・設備・内外装の基本的整備が概ね完了し、今後の運営計画に向けた他棟の検討を開始している。

6. 今後の展望

今後は、敷地全体を段階的に整備し、共用空間、管理機能、職住一体賃貸、他機能を各棟に配置することで、地域の暮らしの中に浸透する場所としての一体的な運営を目指す。

また、入居者・来訪者像の想定を通じて、地域ニーズと整備方針を具体化し、プロモーションや周辺事業者との連携、自動車事業との連動など、運営面での付加価値創出を検討している。



図 2 各棟の平面レイアウト

7. まとめ

本計画は、空き家活用を基盤としつつ、地域での暮らし方・働き方の新たな選択肢を提示する試みであり、職住一体を軸として、持続可能な場づくりに寄与する可能性を示す。

ラポロアイヌネイションによる遺骨・副葬品の返還活動

瀧川 奈々
Takigawa Nana

慶應義塾大学大学院

キーワード：アイヌ民族；アイヌ文化；先住民族；研究倫理

1. はじめに

日本には、日本列島北部周辺、とりわけ北海道の地に暮らしてきたアイヌという先住民族がいる。アイヌ民族は、独自の言語や文化を持ち、独自の歴史を歩んできた、今を生きる民族である。

筆者は、19世紀後半から1970年代までに研究者等によって墓地から発掘・収集され、大学や博物館で保管されてきたアイヌの遺骨と副葬品をめぐる問題に注目し、調査研究を行なってきた。本発表は、浦幌町のアイヌ団体「ラポロアイヌネイション（2020年に「浦幌アイヌ協会」から改称）」の会長を務め、遺骨・副葬品の返還活動を先頭に立って進めた人物である差間正樹氏（2024年2月逝去）との聞き取り調査に基づくものである。

2. 遺骨・副葬品の返還を求めて

返還活動の契機は、北海道大学のアイヌ納骨堂での慰霊式に参加した差間氏が、浦幌で行なわれた遺骨収集の様子やそれを用いた研究を知り、浦幌町出土のアイヌ遺骨が大学に保管されたままにしていることに疑問を感じるようになったことにある。返還の方法について模索していたところ、2012年に浦河町のアイヌの人々が北大に対して遺骨と副葬品の返還を求めて訴訟を起こしたことに背中を押され、差間氏も浦幌で返還活動に動き出す。表のとおり、北海道大学、札幌医科大学、東京大学に対して訴訟を通した返還が実現したことに加え、浦幌町立博物館から地域返還があったことにより、現在判明している浦幌町出土の遺骨すべてが返還されている。

表 ラポロアイヌネイションによる遺骨と副葬品の返還

大学・博物館	提訴時期	返還時期	返還遺骨数	返還副葬品
北海道大学	2014年5月	2017年8月	63体+人数不明	ありあり

		2018年8月	13体	
札幌医科大学	2018年1月	2019年8月	1体	なし
東京大学	2019年11月	2020年8月	6体	あり
浦幌町立博物館		2019年8月	1体	あり

3. 遺骨は再埋葬、副葬品は博物館へ

ラポロアイヌネイションは、返還された遺骨については浦幌町営浦幌墓園に再埋葬を行なっている。浦幌では、同化政策等によりアイヌ文化や伝統の多くが途絶えていたため、再埋葬と儀式へ向けて準備をすすめる中、埋葬や儀式のやり方を一から学んで習得しなければならず、再埋葬や儀式で必要となるモノも用意しなければならなかった。例えば、アイヌの儀式で必要となるゴザを用意するために、他地域から技術伝承者を呼んで技術を教わり、浦幌アイヌ協会の会員たちでゴザ編みに取り組んだ。

また、副葬品については浦幌町立博物館に寄贈するという形をとってきた。これらの副葬品資料は来館者に対して、学術研究の名で行なわれた遺骨・副葬品の発掘・収集の歴史、さらに遡ってアイヌの人々の生活の中で用いてきた歴史を伝えている。

4. さらなる活動への展開

こうしたラポロアイヌネイションの活動は、返還や再埋葬によって終息したわけではない。返還をめぐる諸活動を通して集団としての結束が高まり、返還された副葬品の中にあった網針の存在や北西アメリカ先住民族との交流もきっかけに、ラポロアイヌネイションはサケ捕獲権確認訴訟という先住権を求める活動へ展開しているのである。

地方における「宿」の在り方

宿起点のファン形成の可能性

○道東 学会*1, 浦幌 学会*1, 博物 館*2

株式会社五明/フリーカメラマン 崎一馬

キーワード：宿/観光/地域活性化/DX/ファン形成

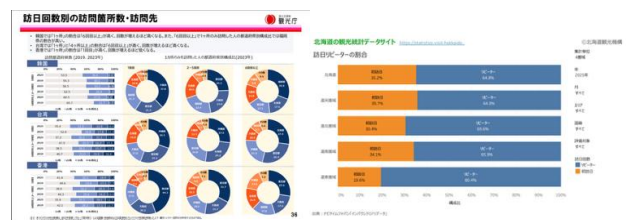
1. はじめに

近年、コロナ禍を契機として宿泊業界では急速な DX 化が進展した。都市部では既に主流となっていた完全無人チェックインや非対面運営の手法が、地方の宿泊施設にも急速に広がっている。しかし、この流れが地方において本当に適した形なのかは、改めて検討する必要がある。本稿では、釧路を事例としながら、地方の宿が果たすべき役割および今後の可能性について考察する。

2. 本文

釧路をはじめとする地方都市に訪れる観光客は、数ある旅行先の中から「わざわざ」その地域を選んでいる点に特徴がある。旅の満足度には、予定外の体験や偶然の出会いが強く影響することが知られており、地元の人との会話や、ガイドブックに載らない店との出会いなどが、旅を一層豊かなものにする。これらの体験は、「また来たい」「誰かにすすめたい」といったファン形成につながる重要な契機である。完全非対面化が進む中で、こうした“人を介した価値”はむしろ差別化の要素となる。宿泊業は単なる滞在の場ではなく、旅の深度を高める媒介としての役割を再評価すべきである。

2023 年以降、訪日外国人は 3,000 万人を超え、国は今後 6,000 万人を目標に掲げている。この増加分の多くは初来日ではなくリピーター層であり、リピーター層は北海道を旅先として選ぶ傾向にある（図 1）。また昨今では都市部ではオーバーツーリズムが顕著化しており、混雑を避けて地方へ向かう旅行者が増加している。道東エリアにおいても、訪れるインバウンドの約 8 割近くがリピーターであり、地域への親近感や関心を既に持った層が多い（図 2）。この層を「地域のファン」へ転換させることが、今後の地方観光における重要な戦略となる。



（図 1）（図 2）

ファン形成のために必要な取り組みは、必ずしも大規模な仕掛けではない。

- ・短い会話の中で地域の魅力を共有する
 - ・ガイドブックに載っていない飲食店やスポットを紹介する
 - ・宿周辺を案内するライトツアーを提供する
- といった小さな接点の積み重ねが、旅の印象を大きく変える。地方の宿だからこそ提供できる“生活圏の温度感”は、非対面化されたサービスが増えるほど価値を増す。

筆者が運営する宿では、2026 年より宿泊者限定の小規模プライベートツアー（周辺ガイド、はしご酒企画など）を導入予定である。宿泊と地域体験を一体化させることで、訪問者が地域に「帰ってきたくなる理由」をつくりたいと考えている。

4. まとめ

地方における完全非対面化は効率性の面では有効である一方、旅の深みを生む偶発性や交流の価値を損なう側面もある。特に訪日リピーターが多く訪れる道東地域においては、宿が地域と旅人をつなぐハブとなり、「また来たい！」と思ってもらふファン形成を支える役割がより重要になる。地方宿泊業は、DX による効率化と、人的な交流価値の両立を図ることで、新たな宿の在り方を提示できると考える。

公共緑地における人種の経験に関する研究

北海道帯広市の都市に居住する先住民アイヌの声から

○小南 光^{*1}
Hikaru KOMINAMI^{*1}

^{*1} 帯広畜産大学大学院 博士後期課程 2 年

キーワード：アイヌ; 環境正義; 質的調査法; 公共緑地; 人種差別

1. はじめに

日本では、2019 年のアイヌ新法の制定を機に、アイヌの人々が抱える生活環境の困難が認識されつつある。環境正義は、出自にかかわらず全ての人が自然の恩恵を受けられるべきという社会思想であるが、国内でアイヌをはじめとした先住民がその権利を主張するためにデモや訴訟などのアプローチを用いる事例は稀である。また、アイヌの人々が自らのルーツを尊重し、自由に自己表現できる公共空間の可能性に関する研究も、イオル政策や森林認証制度を除き、都市景観や緑地へのアクセスに焦点を当てた事例や調査はほとんど見当たらない。

この状況を踏まえ、本研究はロバート・D・ブラードが提唱した環境正義の視点から、「先住民の人々が都市景観および周辺の緑地にアクセスする時、現実に何が起きているのか」という問いを明らかにするため、質的調査法のアプローチを用いて調査研究を実施する。

2. 方法

本研究は、北海道十勝地域に居住するアイヌの人々を対象に、環境的不公平の経験と認識を質的調査法で探ることを目的とした。

2-1. 研究協力者の選定基準

研究協力者の選定基準は、18 歳以上で成人していること、アイヌであると自認していること、北海道十勝地域に少なくとも 1 年間居住し、現在、帯広市内またはその近郊に住んでいることが条件とされた。音声データから自動生成されたトランスクリプトは、アクセントの違いにより不正確なキャプチャが多発したため、手作業でエラーが除去され、その後、匿名化された。

2-2. 緑地訪問の指示と調査プロセス

調査セッションはすべて対面で行われ、同意が得られた場合は録音に加え録画も実施された。協力者は、ライフヒストリーインタビューおよび緑地訪問を通じて環境的不公平の経験と認識を探る調査を受けた。特に緑地訪問では、協力者は研究責任者とともに、もしくは単独で緑地を自由に散策し、訪問中に見たものや感じたものについて 3 枚から 5 枚の写真を撮影し、緑地をめぐる環境的不公平に関する自身の認識を話すように指示された。さらに、協力者全員が人口統計に関する質問と、緑地の利用状況、訪問目的、近隣緑地の安全性に関する認識等を含む短いアンケートに回答した。

2-3. 研究協力者の人数と属性

調査には、帯広市の異なる地区（大空町から 2 名、それ以外の地区から 4 名）に居住する計 6 名の住民が参加した。大空町は歴史的に多くのアイヌの人々が居住してきた背景があり、協力者全員が自身または自身と近い間柄の人物が大空町に居住していた経験を持っていたことを明かした。協力者の内訳は、女性 3 名、男性 3 名の同数であり、年齢層は 55 歳から 84 歳だった。

2-4. 共同分析セッション

質的研究を行う立場にある人間として、人種差別の経験を探る本プロジェクトにおいて、全行程を通じて協力者と反響的にかかわることを重視した。フェミニストおよび反人種差別的な実践の一環として、協力者との対話および口頭諮問の機会を通じた共同分析セッションを採用した。このセッションでは、協力者が提供した写真や物語全体で最も重要だと感じるテーマを共に特定することで、データの共同解釈を行った。

地域学としての「道東学」の振興における博物館の役割

○持田 誠^{*1}
Makoto MOCHIDA^{*1}

^{*1} 浦幌町立博物館

キーワード：地域学；地誌；地域誌；地理学；郷土史；地方史；地方誌；自然誌；自然史

1. はじめに

地域に関するあらゆる分野の学問を総合することで地域の特性を明らかにしようとする「地域学」は、学術的には地理学の一分野である「地誌」、実学的には「観光学」などの側面から各地で発達してきた。そうした「地域学」の振興における博物館の役割を道東における系譜と実情から考察する。

2. 本文

2-1 地元学・地域学の系譜

「道東学」を特定地域について総合的に研究し地域の特性を明らかにする学術分野としてとらえると、近年「地域学」や「地元学」と呼ばれてきた領域に該当すると考えられる。高野（2008）は、1970年代までは研究者による地域研究、1980年代には学校教育の一環としての郷土教育、1990年代後半には社会教育・生涯教育活動として展開し、2000年代以降に全国で定着したとする。廣瀬（2006）は地域学を①自治体主導による地域振興・生涯学習、②民間団体主導の生涯学習、③高等教育機関による学術、④①～③に該当しない地元学の4類型に分類している。内田（2020）は、こうした地元学・地域学の系譜として「語る会」などを含む都市民俗生活誌を位置付けている。

2-2 地誌・地理学の系譜

いっぽう、地域の総合理解を目的とした研究成果として「地誌」があり、学問領域として「地誌学」がある。地誌学は特定地域を対象に自然事象と人文事象を総合的に記述する学問で、地理学の一分野とされる。地理学は、もともと地形学や地域経済など既存の学術分野に沿って地域を理解する「系統地理」と、分析対象を地域全体として各領域を総合的に理解する「地誌」に大別されるが、地誌の系譜は近世以前から各地で編纂されている「風土記」などの系譜であり、民俗誌や自然誌も含む幅広い概念と位置付けられる。

2-3 博物学の系譜と自然誌・博物館

もともと、自然界の事象を観察理解する科学を欧米では *natural history* と呼ぶ。日本語表記では直訳調の「自然史」が一般的で、自然界を地球史視点から捉えようとする考え方が基底にある（糸魚川 1993）。これに対して沼田（2004）は元来、*history* には「記述する」（ヒストリア）という語義があり、自然を科学的に記述するという意味で「自然誌」を提唱した。

いっぽう、幕末の遣欧使節団の一員として大英博物館などを視察した市川清流は、*museum* を初めて「博物館」と翻訳し、福沢諭吉が著書『西洋事情』のなかで用いたことで普及した。文部省は内国勸業博覧会を契機に「博物局」を設置し、のちの帝室博物館や教育博物館へと発展していく。

日本には近世以前から薬草など実学的側面から自然理解を培ってきた「本草学」があった。これが欧米から入った *natural history* と結びついて「博物学」となり、小学教科となったり博物学会が結成されたりした。以後、自然理解に加え、歴史や民俗を含む博物学が博物館と密接に結びつき、今日、地域に関する総合的な学術情報を「地域学」として集積発信する拠点として地域博物館は位置付けられている。

道東における博物館の歴史は、1936年に米村喜男衛がモヨロ貝塚資料を土台として開設した北見郷土館（現網走市立郷土博物館）と、同年に片岡新助の尽力で自然史資料を土台に開設された釧路市立郷土博物館を嚆矢とし、実質的に「道東学」の母体となる学的知見の集積拠点となってきた。

3. まとめ

風土記以来の人文地理学的知見と博物学の伝統を引き継ぐ自然誌学的知見の集積・発信拠点として博物館があると言える。さらに、いわゆる地元学的視点から地域の活力の向上に寄与する役割が今日の博物館には求められていると考えられる。

地域だからできる英語教育

木下 直哉
Naoya Kinoshita

日本語教師
English Hub Hangout

キーワード：国際理解；英語教育；地域教育；観光；道東

1. 活動背景

日本の学校英語教育においては 2020 年より「外国語活動」として、本格的に 3 学年から英語学習を始めるようになり、以前の教育方針に比べ、より実践に即した「使える英語」の教育が行われるようになってきている。しかし、依然として都市部以外の地域では、実際に英語を使用する機会は比較的少ない。

一方、昨今の海外での日本文化への人気の高まりに伴う日本語学習者、観光客の増加により、日本人の外国語・異文化への理解がより一層重要視されると予想される。

これらの背景から、地域における英語教育において、その必要性を感じられる場が必要であると考えられる。

2. 活動指針

日本語教師職務での英語使用経験から、英語を中心とした、世界の文化や価値観に触れられる場を提供することとした。「誰でも気軽に集まれる場」にしたいという思いから、Hangout（「たまり場」の意）と銘打ち、現在は下記の 3 つを指針として掲げ、活動している。

2.1 楽しく英語を学ぶ

早期英語教育における懸念点として、英語学習を敬遠することが挙げられるため、「楽しく英語を学ぶ」ことを中心に掲げている。

2.2 世界を知る

島国という特徴から、情報社会である現代においても、他国と比べ日本では他国の情勢に目を向けにくい状況にある。文化的・習慣的背景を中心に「世界を知る」ことは、国際交流の場において非常に重要な役割を担うと考えている。

2.3 自分を知る

英語の言語的特徴として、自己表現・意思伝達を重要視することが挙げられる。自分の身の周りにあるものから学ぶことで英語を身近に感じ、「自分を知る」ことにより、健全な自己形成の促進、それに伴い、英語に限らず、適切に自分を表現できるようになることを目的としている。

3. 活動内容

現在、日曜日の午前中に Hangout の時間を設け、小学生を中心に様々な活動を通して英語を学んでいる。また、多文化への理解を深める活動として、各回、他国について学ぶ時間を設けている。

また、国際交流・英語使用の機会として、本年 8 月にアメリカ合衆国から筆者が教えている日本語学習者の家族を招き、英語で町を案内する「Be an English tour guide! 英語で阿寒町案内プログラム」を初開催した。

4. 今後の課題・展望

今後、中高生の参加を促し、学んだ英語を実際使用できる機会の提供を増進するとともに、ツアープログラムに関して、余裕のある準備期間を設け、さらに洗練していく必要がある。

また、日本語学習者は日本文化に対する理解と関心があり、比較的案内しやすいという点は、本プログラムにおいて、極めて重要であると考えられる。今後も同様に学習動機の維持を目的として、定期的に日本語学習者を招き、開催することを計画している。

加えて、安定開催を実現するために、道東教育機関で就業中の ALT（外国語指導助手）に協力を要請することも検討している。最終的には、地元の学生たちが自立的にガイドを行い、ツアーの一環として収益化できるようになることを目指す。

食を通じた“つながり”の再生

-地域交流イベントの開催と考察-

○佐藤 慶太^{*1}、作左部 実李^{*1}、岩元 瑞樹^{*1}、清水 仁就^{*1}、大和 柊花^{*1}
Keita SATO, Minori SAKUSABE, Mizuki IWAMOTO, Yoshinari SHIMIZU and Shuka YAMATO

^{*1} 北海学園大学経済学部地域経済学科 西村宣彦ゼミ 3年

キーワード：つながりの希薄化、生産者との交流、地域食堂、中心市街地空洞化、学生の挑戦と地域との共創

1. はじめに

北海学園大学西村ゼミでは、「持続可能な地域づくり」をテーマにゼミ活動を行っている。昨年度は、芽室町在住の野澤一盛氏（ドット道東）との出会いをきっかけに、同町の空き店舗施設「ユナイトベース」を利用して、地域交流イベント『メモロノエン』を、地域の方々の協力を得て開催した。開催を通じて、地域の方々の温かで前向きな姿勢や、十勝の農作物や生産者の方々の魅力に触れ、今年度も十勝で、今度は「食」をテーマに活動したいと考えた。私たちは再び十勝の方々のご協力を得て、帯広市中心部に新しく生まれた「藤丸パーク」で、“つながり”の再生をテーマとした地域交流イベント『おびまる』を今夏開催した。そこででの経験を基に、食を通じた“つながり”の再生の試みの意義・課題・可能性を考察する。

2. 地域交流イベントを開催した背景と目的

私たちは「食を通じた“つながり”の再生」というテーマに、「①生産者と消費者のつながりの再生」、「②地域の中の人々のつながりの再生」という2つの意味を込めた。このようなテーマを設定した背景には、①農家と消費者の関係の希薄化、②孤食と孤立・孤独の広がりが、今の日本社会において大きな社会的課題になっており、これらの課題解決に向けて取り組むことは、重要な意義があると考えたからだ。

会場の「藤丸パーク」は、2025年7月に生まれたばかりの屋外商業施設である。十勝の人々に長年親しまれてきた藤丸百貨店が2023年1月に閉店し、新体制で新しい商業施設の開業を目指す2030年までの「つなぎの施設」として、旧・藤丸百貨店に隣接する空き地に開設された。帯広市では中心市街地の空洞化が深刻な課題となっており、新たな人の流れや交流を生むことを期待された「藤丸パーク」で、札幌の大学生が小さなイベントの開催に挑戦することが、課題解決に向けた一歩になるのではないかと考えた。

3. 地域交流イベント「おびまる」の概要

イベント名の『おびまる』には「帯広・十勝の子どもや大人、生産者、大学生などを丸くつなげる」との思いを込めた。私たちは、①十勝の生産者が育てた野菜を使ったオリジナルメニューを提供する「地域食堂」、②十勝の野菜や生産者の魅力を伝える「野菜直売」、③廃棄野菜の染液で布を染める「染物体験」と、紙粘土で作ったパーツで「理想の藤丸パークのジオラマ」をみんなで作る「参加型アート」という「2つのクラフト」の、3つの企画ブースを準備した。

私たちはこれら3つの班に分かれて、地域の方々と打ち合わせを重ねながら、準備を進めるとともに、様々なルートを通じてイベント広報にも取り組んだ。イベント当日は、3つの企画ブースが相乗効果を発揮し、多様なつながりや交流が無理なく自然に生まれるしかけとなって機能することを狙った。

4. 開催結果とまとめ

当日の来場者数は、学校を通じた広報が夏休み前に間に合わなかったこと、平日開催、「藤丸パーク」の認知度の低さなどもあり、想定には届かなかった。しかし地元の協力者の口コミや、お昼時には近く企業や官庁に勤める方々の来場もあり、多様な交流が生まれた。大学の幟を見て来てくれたOB・OGや、お一人ないし二人連れの高齢者の来場も見られ、人とのつながりを感じられる場になった。

生産者と来場者が直接交流する場面は多くなかったが、生産者や野菜を紹介するポスターを掲出し、配布したオリジナルの「農家カード」は好評を得た。私たちはSNS発信等を通じて生産者の方と交流を深め、イベント後も関係が続き、今冬には私たちの取り組みに刺激を受けて、生産者主体の新イベントが開催された。地域の人達と「つながりの場」を共につくる学生の挑戦は、人のつながりだけでなく、コトや挑戦のつながり（連鎖）も生んだのではないかと考えた。